前漢期は、先秦期から諸五行説を引き継ぎ、それを拡充した時期であった。例えば、五行の相勝が引き続き論じられるのに加えて、相生説も登場する。また、儒学にも積極的に五行が用いられるようになった。例えば、儒者たちが漢朝の徳運について議論し、『尚書』洪範を元にして『洪範五行伝』が説かれ、時令の一系統である月令が礼の重要文献として地位を高めた。

しかし、各分野でそれぞれ五行を用いた論理を充実させて行く一方で、分野を超えた結びつきはそれほど強くなかった。例えば、羊が月令では木に配当されながら、『洪範五行伝』では火に配当される等、一つの事物が分野によって異なる配当のされ方をしていた。また、時令説の中でさえも、季節の区分や五音の配当等、大小の差異がいくつか見られる。すなわち、五行説として整合した一つの体系を有しておらず、かつそれを目指すような議論も見られない。

やがて前漢末期になると、劉向と劉歆が、このように別個に発達を遂げた五行説同士を結び付けて体系化を試み、更には配当のバラつきを解消させるために、旧説を書き換えることもあった。このように、彼らの五行説は、前漢期の他の諸五行説と性格が大きく異なる。筆者は、五行説史上、劉向・劉歆が重要な画期であったと考える。

そこで本章では、前漢期の、劉向・劉歆より以前の五行説、特に五徳終始説・時令・『洪範五行伝』を取り上げ、それらの内容・構造について分析する。これによって、前漢期の五行説の発展と多様性（つまり不統一さ・バラつき）について示す。